

OPINION

これからの地域連携

地域課題にコミットする地方大学

「21世紀への適応モデルは、20世紀モデルにより衰退した地域から生まれる」と語る西村教授。
地方大学だからこそ先陣を切って実現し得る、新たな地域連携のあり方を示す。

時代の変化が表出する 地方はチャンス宝库

「第4次産業革命」「人生100年時代」などの言葉に表されるように、社会は大きな変革期を迎えています。私たち大学は、この変化の波に乗り切れているでしょうか。

そもそも大学は、社会が求める人材、知、技術などを、世の中の先頭を切って生み出していく場所であるはず。過去を振り返ると大学は、明治期は近代化を担う中核人材やシステムを、戦後は高度成長を支える基盤人材や生産技術をつくり出してきました。しかし、成熟期に入った現在の社会が大学に求めているものは、これらとは異なることを、まずは受け止める必要があります。時代の開拓が大学の本分であれば、新たなものが求められている今こそ、大学が活躍すべき時でしょう。

社会変化、中でも少子高齢化、産業の衰退といったネガティブな課題は、すでに地方で端的に表出しています。こうした、社会変化が色濃く反映された現場を多く持つことが地方大学の強みです。大学が持つ知見を投入することにより、現場にどんな化学反応を起こせるか。社会変化を捉えた新しい研究、新しい人材教育に乗り出すきっかけは、都市部より地方のほうがはるかに多いはず。

地方創生を阻む最大のネックは、地域の「しがらみ」です。因習、既得権、固定化された人間関係などが、新たな挑戦を多々阻んできました。しかし、人口減が、こうしたしがらみを過去のものにしつつあります。幸いにもこれまでの近代化、産業化の蓄積により、インフラは地方まで行き渡っており、個人や小規模集団でも活躍できる舞台は整っています。このよ

うに今は地方大学にとって、新しいことを始め、役割の再定義を行い、地域で十分な存在感を打ち出せる絶好の機会なのである。あとはそれにのりかざるかでしょう。

対症療法から 富を創造する連携へ

では、地方大学の地域連携はどのように変わるべきでしょうか。従来の地域連携は、「対策」「再生」を目的としたものでした。学生を高年齢者の住む農村部に派遣したり、商店街の振興策を考えたり。学生の教育には効果があったとしても、地域の発展という点ではマインスをゼロに戻すまで、イノベーションにはつながりません。対して私が提案するこれからの地域連携は、地域と大学の資源の

三重大学 副学長(社会連携担当)
大学院地域イノベーション学研究所教授

西村訓弘

にしむらのりひろ ● 三重県南伊勢町(旧南島町)出身。1987年筑波大学農林学類生物応用化学専攻卒業、1995年博士(農学)取得。(株)神戸製鋼所研究員、(株)ジェネティックラボ代表取締役社長などを経て、2004年に三重大学に着任。2013年副学長就任。2016年より現職。文部科学省地域イノベーション推進委員会委員。



取材・文/見山雄介 撮影/加納将人

大学が地域課題にコミットするための5つのSTEP

1	2	3	4	5
<p>時代の変化を直視する</p> <p>「今までのやり方は、これからの時代には通用しない」と認識することがまず重要。取り組もうとしていることが、新しい時代に即しているかを想像する力も求められる。</p>	<p>地域の資源を知る</p> <p>地域にとって「数居が高い存在」から「地域の特徴や課題を熟知した身近な存在」へ。地域を教育・研究のテーマとして捉えて観察し、埋もれている資源を知る。</p>	<p>自学の資源を知る</p> <p>他のセクターと比べると、実は大学は、人も金も十分なストックを持つ、圧倒的に安定した組織。学内の研究成果や知見等を把握し、地域活用の視点から捉え直す。</p>	<p>大学を地域のたまり場に</p> <p>地域を支える人たちが集まる場、ネットワークの「ハブ」にあたる存在に。大学の存在価値が増すだけでなく、集まった人同士で思わぬ化学変化が起きる可能性もある。</p>	<p>リソースを活用する機能を持つ</p> <p>各教員の研究資産や能力を適切に生かせるよう、アレンジメントする機能が求められる。これからの社会を想像し、地域と学内のリソースの利活用、再結合を提案する。</p>

地域ならではのイノベーションで 地方発の「逆明治維新」を起こそう

資源を新たな形で組み合わせること、で、地場産業の「第二創業」に取り組んでいます。例えば本学の地域イノベーション学研究科に社会人入学した老舗企業の後継経営者。彼はAIを事業に組み込んで顧客動向の予測システムを開発、今ではそれを他社にも販売しています。あるいは新規農業法人。本学が老舗製油会社と引き合わせた結果、製油工場の排熱を利用し、1500万円/反という超高収益農業を実現しています。三重県各地で今、大小のイノベーションが起きています。

世界に通用する 次代のモデルをつくる

今、地方がめざすべきは、「逆明治維新」ではないでしょうか。中央に倣って、中央の劣化版になるのではなく、地域が自立して富を生み出す。その中で地方大学は、さながら江戸時代の藩校のように、地域を担う中核人材が集まり、議論し、学ぶ場として、維新をけん引する役割を担います。成果はそのまま、アジア諸国への提言になります。急成長と少子高齢化が予測されているアジア諸国は、日本の地方と近い未来を迎えるはずだからです。私たち地方大学は、自学の地域のみならず、世界に通じる先進モデル社会をつくらなければならないのです。

※三重大学での取り組みの詳細は、P.18から紹介しています。